

# 在宅看取り 知る命

命の大切さをテーマにした小学生向けの福祉読本「みんないっしょに」を県が改訂し、この春県内の全ての小学校に配布した。初版が発行された2000年以來の改訂で、自宅で家族の死を看取る「在宅看取り」にも触れ、命のつながりを考えさせる内容となっている。

## 小学福祉読本を改訂



①在宅看取りについて取り上げた福祉読本  
②改訂された福祉読本を紹介する嘉田由紀子知事＝大津市京町4丁目の県庁

## 子から遠ざかる死 ■「自宅で最期」県は15%に

福祉読本は発行当初、8割以上の学校で活用されたが、10年には3割以下に落ち込んだ。県は「時代の流れに沿った内容を盛り込んだ教材が必要」として改訂に取り組みことにした。

改訂版では第1章を「大切な命」と題し、新たな題材として在宅看取りを盛り込んだ。見開きのページには、東近江市の小学5年生の女の子「恋ちゃん」が92歳の曾祖母の最期を自宅で看取った様子を4枚の写真で紹介。フォトジャーナリストの國森康弘さんの撮影で、「もっともっといっしょにいたかった」「人の命はかぎりがある。でも、おおばあちゃんはわたしの心の中にいる」などと恋ちゃんの心情をつづっている。

小学生の福祉読本で在宅看取りを扱う背景には、「死」が子どもたちの生活から遠ざかっている現実がある。県によると、県内では1980年ごろまで約半数の人が自宅で最期を迎えたが、2011年には総死者数の15%にとどまっている。会見で本を紹介した嘉田由紀子知事は「死は病院や施設に閉じ込められてきたが、本来は家族の中にあつた。子どもたちには改訂版を通じて『命は受け継がれる』という考え方を学んでほしい」と話している。(伊藤舞虹)